

2022年8月15日 発行

# JSS 特別レポート

JSS Special Report

## 指導者殺害が各アルカイダ系組織に及ぼす影響 (世界共通：テロ)



株式会社ジェイ・エス・エス

危機管理コンサルティング事業本部

契約企業様向けウェブサイト：<https://www.jss-ltd.co.jp/rmc>

## 指導者殺害が各アルカイダ系組織に及ぼす影響 《世界共通：テロ》

米国は8月1日、国際テロ組織アルカイダの最高指導者ザワヒリをアフガニスタンの首都カブールで殺害したと発表した。

現在、アルカイダ指導部の影響力は限定的ながら、アジア、アフリカなど世界各地でアルカイダ系組織が依然として活動しており、アルカイダ創設メンバーで長年同組織の思想的指導者の地位にあったザワヒリの死は、米国とその同盟国に対する報復テロを喚起するおそれがある。

### 1. カブール市内の潜伏先を4月から監視

7月31日早朝、アフガニスタンの首都カブールで国際テロ組織アルカイダのアイマン・ザワヒリ指導者（71歳）が、米中央情報局（CIA）のドローン（無人機）から発射されたヘルファイア・ミサイルで殺害された。米時間8月1日にバイデン米大統領が発表した。

米安全保障局（NSA）によれば、アフガニスタンにおける昨年9月のタリバン政権の誕生と米軍の撤退に伴い、ザワヒリ指導者がカブールに戻ったとのインテリジェンス情報を入手し、今年4月には既に潜伏先を突き止め、秘密裡に監視していた。ザワヒリ指導者が潜伏していた住居は、米大使館や英大使館からも近いカブール中心部の一等地にある、タリバン幹部シラジュディン・ハッカニ氏の側近の所有物であったとのことである。

タリバンの報道官は今回の米国によるドローン攻撃を「国際的原則と米軍の撤退合意に反する」として非難した。一方、ブリンケン米国務長官も、タリバンがザワヒリ指導者を匿っていたことは「ドーハ協定(注)違反である」と述べた。

昨年の米軍撤退後、アフガニスタンでの米国の情報収集能力が大幅に低下したのではないかとの懸念が指摘されてきたが、米国は依然として重要な標的に対する作戦実行能力を有していることが示された。同時に、タリバン内の少なくとも一部がアルカイダとの連携関係を維持していることも判明した。

ザワヒリ指導者は、アルカイダ最初期の創設メンバーの数少ない生き残りの1人であったと同時に、思想的指導者として動画や音声を含む多数のプロパガンダ資料に長年登場してきた。

(注) ドーハ協定（米・タリバン協定）：2020年2月9日に調印された和平協定。

### 2. ザワヒリの死がテロ攻撃の口実になる可能性

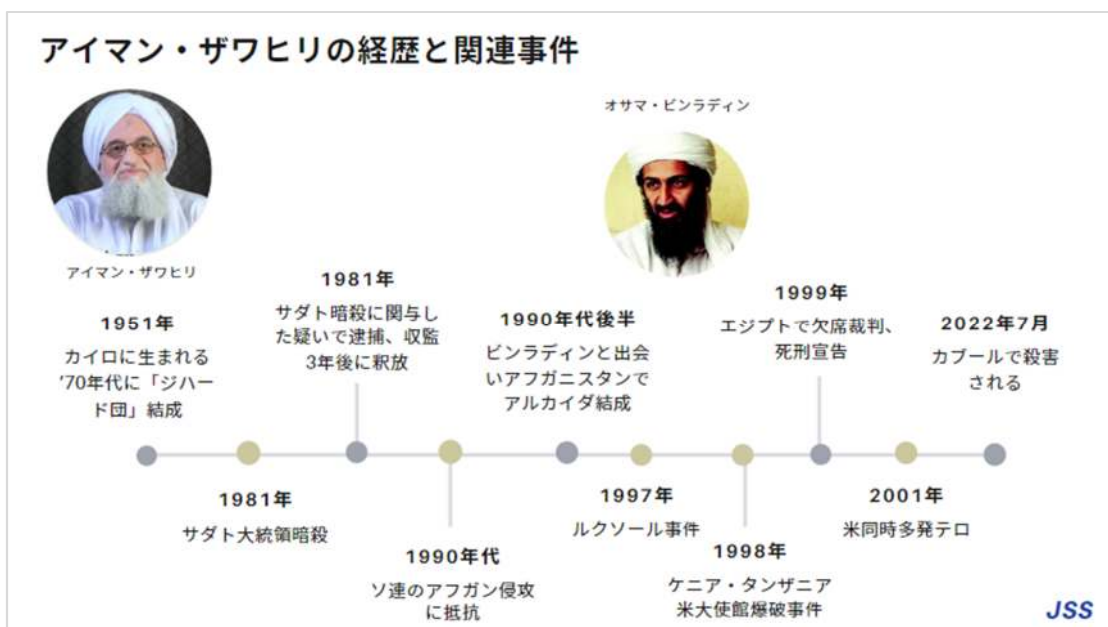
アイマン・ザワヒリはエジプト出身の医師で、青年期に「ムスリム同胞団（MB）」に入団したが、エジプト政府によるMB弾圧に反発し、政権転覆を目的としたより過激な組

織「ジハード団」を1970年代に結成した。

1981年のサダト大統領暗殺に関与した疑いで逮捕・収監され、出所後の1990年代にサウジアラビアで働いていた時にオサマ・ビンラディンと出会い、アフガニスタンの対ソ連戦争を支援しながら、アルカイダの創設に関わったとされる。

「近い敵（エジプト政府など）を打倒するために、遠い敵（エジプト政府を支援する米国など）を標的にする」という独自戦略を展開し、1998年にはビンラディンと共同で、「米国人を殺害することは、それが可能な全ての国におけるイスラム教徒の個々の義務」というファトワ（宗教令）を発した。

1997年のルクソール事件（邦人10人を含む62人死亡）、1998年のケニア・タンザニア両国での米大使館連続爆破事件（224人死亡）などに関与したほか、2001年9月11日の米同時多発テロ事件（邦人24人を含む2,977人死亡）でも首謀者の1人と見なされている。



2011年にパキスタン北部でビンラディンが米軍の特殊作戦によって殺害されると、後を継いでアルカイダの最高指導者に就任した。

最高指導者としてのザワヒリは、世界各地におけるアルカイダのテロ活動を直接指揮していた訳ではない。各国のアルカイダ系組織は既に個々の活動（身代金誘拐、強盗、恐喝など）を通じてテロ資金を自給自足するようになっており、中央指導部からの資金供給は限定的と見られることから、ザワヒリの死がアルカイダ・ネットワークのテロ活動に与える影響は大きくないものと見られる。

ただし、アルカイダ系の各組織は、ビンラディン殺害後に後継者となったザワヒリに対して忠誠の誓い（バイア）を表明しており、ザワヒリの後継者に対しても同様にする可能性が高い。こうした手順は、直接的に各組織の能力を強化することはなくとも権威付けにはなり、新兵のリクルート等に利用されるものと見られる。

### 3. ザワヒリの後継者の有力候補

現時点で、アルカイダはザワヒリの死や後継者についての公式声明を発表していないが、次の指導者として最も有力と言われているのが、エジプト生まれのサイフ・アデルである。アデルはアルカイダ最初期メンバーの1人で武装闘争の経験を豊富に持ち、ジハード主義者の間で尊敬を集めている。

また、モロッコ生まれでザワヒリの娘婿に当たるアブドゥッラフマン・マグリビも有力候補の1人である。彼は、ザワヒリと共に創設したアルカイダ広報部門の「サハブ」責任者でもある。

ただし、長年イランに滞在しているとされるこれらの古参幹部が指導者としての役割を十分果たせるのかについては疑問である。従来は彼らを事実上匿ってきたイラン当局も、アルカイダ最高指導者となれば話は別であり、彼らを軟禁下に置いたり、出国を禁じたり、あるいは西側諸国との取引材料として利用する可能性も出てくる。

ただ、過激派が比較的活動しやすいアフガニスタン・パキスタンに滞在中のカリスマ性のあるアルカイダ幹部の中からは、有力候補の名が挙がっていない。アフリカやアジアのアルカイダ系組織の幹部が最高指導者の地位を引き継ぐことは、正統性など様々な理由から考え難く、アルカイダ中央指導部の人材不足も指摘されている。

[ 新指導者の有力候補と目されている人物(イラン滞在中?) ]

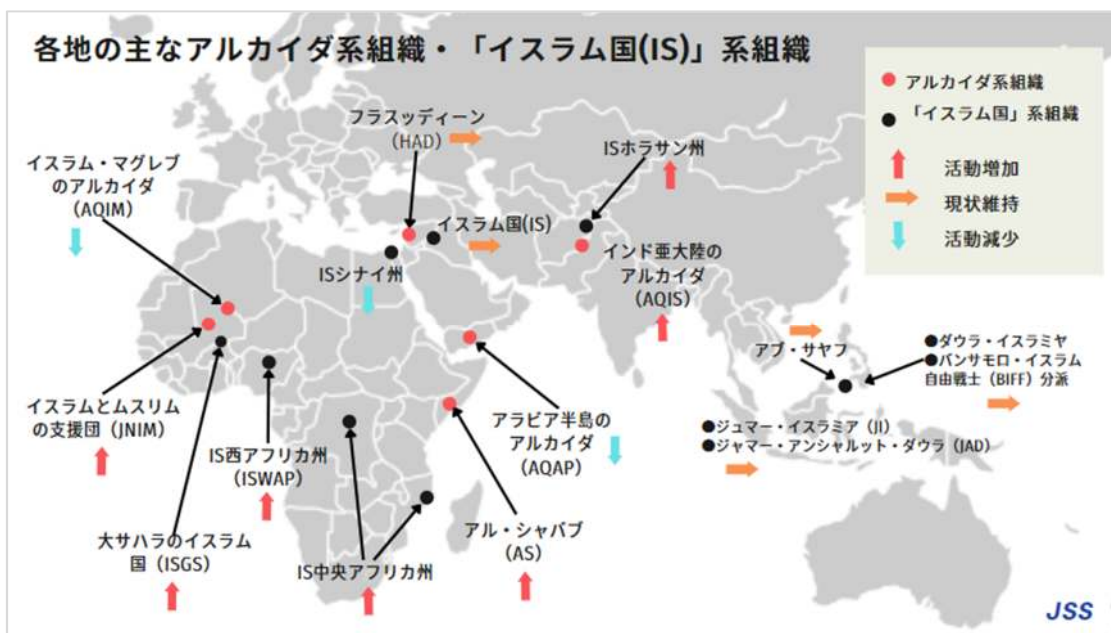


### 4. 今後のアルカイダの動向

米国などが各地で展開している対テロ作戦によって、アルカイダや「イスラム国(IS)」などのテロ組織の有力指導者が相次いで殺害されている。カリスマ性のある人材の不足やプロパガンダの陳腐化もあって、アルカイダ中央指導部が有する脅威のレベルは、10年前と比べても大幅に低下していると言える。

しかし、アルカイダ・ネットワークがこのまま衰退に向かうと判断するのは時期尚早であり、そのイデオロギーは今後も生き続け、新たな手法を取り入れて水面下でのリクルートや洗脳を繰り返すことが予想される。

現在活動している世界の主要なアルカイダ系組織とIS系組織は次図のとおりである。



有力な指導者が殺害されたことで弱体化したグループもある一方で、特にアフリカには、脆弱な国家体制に付け込んで近年勢力を拡大しているグループが複数存在するほか、東南アジアにもテロ活動を継続しているグループがある。欧米諸国では、組織としての活動は近年見当たらないものの、個人がインターネットなどを通じてアルカイダやISの過激主義に染まり、単独でテロを敢行する事件が、未遂事例も含め続発している。

前身組織がアルカイダに忠誠を誓っていたISは、活動の方向性の違いにより2014年頃からアルカイダと敵対し、ザワヒリに対しても非難を繰り返してきた。より暴力的で斬新なプロパガンダ手法により、世界中の多くの若者がISの旗の下に集結し、アルカイダからISに鞍替えする者も続出した。ただし、アフリカなどではその時々状況や利害関係に応じて、両者が緩く連携したりしているケースも窺える。

アルカイダとアフガニスタンのタリバンの関係は曖昧なままであり、ザワヒリが少なくとも一部のタリバン幹部に支援されていたことは間違いないものの、米軍が作戦遂行できたのは、タリバン内部の何者かが情報をリークした可能性も指摘されている。

ザワヒリはタリバン創始者には忠誠の誓いを表明していたが、現在のヒバトゥッラー指導者に対しては表明していない。

今後就任するアルカイダの新指導者が従来の路線を踏襲するのか、あるいは指導者交代は退屈なプロパガンダ手法を刷新する機会だと捉えて新たな方向を模索するのかは不明であるが、アルカイダの最大の“戦果”である9.11同時多発テロの21周年記念日などに合わせて新指導者を発表したり、米国やその同盟国に対する報復テロを呼びかける可能性も考えられる。

以上

本レポート内容の全部または一部の転送・転載・第三者への提供を厳禁します。